

## 第2部会

した点で、宗教改革からカントへの道筋は一本線につながっている。パウルゼンによると、カントが批判の対象としたヴォルフ哲学は、中世カトリックのスコラ哲学の再現と違ってよい存在であった。パウルゼンは、思弁的理性にもとづく独断論であるという点で、カトリックとカント以前の合理主義の哲学者を共通の批判の組に乗せようとした。さらに、パウルゼンによれば、カントの理性の自律は、ルターが信仰に関して地上の外的権威に服従することを批判した点と軌を一にしている。教皇でさえも誤りうるのであり、カントが自らの内なる良心を真理の最終根拠にしたことは、ルターの問題と一致するのである。

## ドストエフスキーとカント

元 春 智 裕

ゴロソフケルの著書『ドストエフスキーとカント―カラマゾフの兄弟』とカントの「純粹理性批判」についての一読者の思索』(Голосыкер Я.С., Достоевский и Кант, 1963. モスクワ)は、本書の副題が示すように、ドストエフスキーがいかにカントの『純粹理性批判』を読んだのかということがテーマであり、ドストエフスキーによるカント批判を扱ったユニークな内容となっている。

『カラマゾフの兄弟』の中に、カントが『純粹理性批判』「先験的弁証論」におけるアンチノミーの問題が、登場人物の

対話の前提となっていることを、ゴロソフケルは指摘している。①世界は時間においてははじめを持ち、空間においてその広がり何らかの限界を持っているのか、それとも世界は無限で永遠なのか? ②どこかに(もしかしたら、私の思惟する《われ》の中なりとも)分割できず破壊されない統一が存在するか、それともすべては分割され、破壊されうるのか? ③私は自分の行為において自由であるのか、それとも、他の存在と同じように、自然と事物と自然の秩序は私たちがあらゆる研究を通じて問題にすべき最後の対象であるか? ④世界の最高原因は存在するのか、それとも、自然の事物と自然の秩序は私たちがあらゆる研究を通じて問題にすべき最後の対象であるか?

カント的アンチテーゼ(無神論)を体現したイワンの知性の悲劇を中心に議論が進められていく。カラマゾフ老人を殺したのは科学であり、無神論的な自由な知性、哲学の知性、イワンの知性がカラマゾフ老人を殺した。この知性が象徴的な悪魔II殺人犯ということになる。「もし神がいなければすべてが許される」というイワンの語る命題は、カントの「先験的弁証論」におけるアンチノミーを前提としている。イワンの知性が最終的に破綻し、イワンの思想を忠実に実行したスメルジャコフは自殺し、また、イワンも狂気へと追いやられてしまう。

カント自身は道徳的な実践理性の領域における定言命令により、このアンチノミーの両極端における無限の往復運動からの脱出を図った。しかし、ドストエフスキーにおいてはそうした解決はとられなかった。良心の声のうちに神の存在を感じていながら、神があるかないかを知らないというイワンの知性の

源をカントの批判哲学に観る。そこから、ドストエフスキーはイワンの姿を通じてカント哲学への批判を行っているというのがゴロソフケルの解釈である。ドストエフスキーは思弁と感性の二つの深淵を同一瞬間に受容させることで解決を図った。それは心情の知により形式論理を破ろうとする試みでもあった。「マドンナの理想」と「ソドムの理想」を同時に受容するといふドミトリーの立場、それは二重世界の矛盾を受け入れ、実体化した矛盾にひそむ生活の意味を高唱することである。テーゼとアンチテーゼの矛盾の永久の決闘であり、ドミトリーにとりそれは秘密と神秘の結合ともなり、悲劇的で悪魔的な美としての生活を開示する。そこには、闘争、矛盾を徹底的に生きることを通して、カント的な二律背反の袋小路からの出口が「生ける感情の良心」、「愛の熱烈な活動、実行」におのずと求められていくというドストエフスキーの救済の方向が示されることになる。

## カント『宗教論』における 「根本悪」の普遍性

保 呂 篤 彦

『宗教論』第一篇の叙述によると、「根本悪」とは、道徳法則に反する動機を「道徳法則への尊敬」に優先するものとして「格率」に採用する「選択意志」の「性癖」である。このため人間の「心術」は腐敗しており、人間が形成する「格率」はす

べて悪であって、そこから生じる全行為が、「道徳性」の観点からは悉く悪しきものとならざるをえず、この意味で、この悪は「根本的」なのである。しかし、それはあくまで「素質」ではなく「性癖」であるから、人間が自ら招いたものと考えられる。こう見る限り、「根本悪」とは、各人がそれぞれ自分で招いた《個人的悪》であり、それが「普遍的」であるのは偶然でしかないように思われる。つまり、「根本悪」の「普遍性」とは《個人的悪の総和》でしかなく、「根本悪」と「人類（人間性）〈Menschheit〉」との関係は偶然的であるように見える。

そうであるから、この《個人的悪》をカントが人類の全成員に帰すのはなぜか、いかなる根拠をもってその「普遍性」を主張しているのかが、研究者の議論の対象になる。

ところが、「悪原理に対する善原理の勝利と地上における神の国の建設」と題された『宗教論』第三篇でカントがその克服を論じる悪は、《人間は一緒にいるだけで互いに他を悪くする》という、まさに《人類的悪》であり、しかもそれは、第一篇で既に論じられた「比較する自愛」という「人間性〈Menschheit〉の素質」の誤用の結果としての「文化の悪徳」に他ならない。この《人類的悪》の克服には、個人の道徳的完成だけでは不十分であり、人類が「倫理的自覚状態」を克服し、「倫理的公共体」を建設することが求められるが、そのためにはさらに神が要請されるとカントは主張する。彼は、個人による悪の克服が「倫理的公共体」の建設という人類の完成と不可分であることを自覚していたと考えられる。カント本来の普遍的「根本悪」は《個人悪の総和》ではなく、人類全体としての道徳的